

1. テキスト

「表現作用」「五」。第1～3段落。151頁12行目～154頁13行目まで。

2. テキスト解釈

「五」

「五」では「三」において達成された(142, 10. 148, 13)「自覚的統一の根柢」がさらに解明される。

(第1段落)

第1段落はこれまでの考察の成果と、上述の如き「五」での課題提起である。「表現作用の如何なるものかを論じ、種々なる作用との関係を明にする」のは「六」以降の課題である

(第2段落)

第2段落では第3段落冒頭に要約してあるように「意識に於ては、我々が意識して居るという意味に於て、意識せられないもの、即ち意識としては無なるものが働く」ことが述べられる。これは「昨日の意識と今日の意識が直に結合して一つの意識となる」ということから導出されているが、「意識としては無なるものが働く」ということは「現在の意識」についても言い得る。知覚は瞬時に消え去るからである。カントは経験における多様の統一が可能となる制約として超越論的統覚を演繹し、その統一から昨日の意識と今日の意識の統一を分析的に導いている。またカントの超越論的統覚は直観することはできず、その意味で「意識としては無なるものが働く」とも言い得るであろう。

(第3段落)

第3段落では「意識の統一の根柢」が無であるが故に「創造的」であり、「すべての点に働いて居る」ことが述べられる。西田はこの「無の方向」にプラトンの質料(正確には「場(コーラ)」、プロティノスの「実在を映す鏡」、さらには「創造もせない創造せられもせない」というスコトゥス・エリウゲナの「第四の立場の如きもの」を見ており、この「無の方向」を含むことによって「意識統一が意識統一となる」と考える。そうして「かかる立場が直に第一の創造の立場である時、真の意識統一を見る」とあるのが、「自己の根柢たる意志の自覚」(151, 14)である。

西田はここで「意識統一の世界」と「意識統一の根柢」を区別している。「意識統一の世界」について、西田は「プロチンが我々の心は円形運動をなすと云った如く、意識の統一は始となると共に終となるものでなければならぬ」とし、その「円形が単なる円形であって、幾度でも同じ回転運動をするに過ぎないと考えられる時、単に自然界を見」、「此の回転運動自身が螺旋状にして積極的意義を有する時、我々は意識統一の世界を見ることができるとしている。この「見る」はもちろん知的な直観である。

これに対して「意識統一の根柢には、創造もせない創造されもせないというスコトゥス・エリウゲナの第四の立場の如きものがなければならぬ」としている。「意識統一」は「無にして有」(153, 14)であるが、「意識統一の世界」が有の方向、「意識統一の根柢」が無の方向であろう。そうしてこのような第四の立場が「直に第一の創造の立場である時、真の意識統一を見る」とされている。そこにおいて見られるものが「意識統一の世界」である。

「意識の統一は一面に於て無でなければならぬ」とされ、「此点に於て自己はすべての自己の内容に対して平等である」と、仏教における空を思わせる表現が続き、それと同時に「すべての点に働いて居る」と述べられる。まさに無なるが故に働かざる所なしである。

この辺りの叙述も趣旨としては『善の研究』第4編第4章と同一である(岩波文庫改版

250～251 頁)。そこでは「意識統一は見ることもできず、聞くこともできぬ、全く知識の対象となることはできぬ。一切はこれに由りて成立するが故に能く一切を超絶して居る」と述べ、「仏教はいうに及ばず、中世哲学においてディオニシュー一派のいわゆる消極的神学が神を論ずるに否定をもってしたのもこの面影を写したのである。ニコラウス・クザーヌスの如きは神は有無をも超越し、神は有にしてまた無なりと云って居る」としている。同様の表現は第 2 編第 10 章にも見られる。(同 132～133 頁)